

# 岡本太郎の

おかもと  
たろう

一つの恋の  
ようなものだった。

Taro Okamoto's Okinawa - what he found

ドキュメンタリー映画  
沖繩  
おきなわ

# 何もなないことの 眩暈

鳥は小さくても  
ここは日本、いや  
世界の中心だという  
人間的プライドをもって、  
豊かに生き抜いてほしいのだ。  
沖縄の心の永遠のふくらみとともに……

## DOCUMENTARY FILM TARO OKAMOTO'S OKINAWA -WHAT HE FOUND

日本を代表する芸術家・岡本太郎(1911 - 1996)。彼は、1959年と1966年に沖縄に旅に出た。きっかけは、日本人としてのアイデンティティを探し求めることを目的に、日本中を旅したことだった。彼の究めたかったものは、日本人とはなにか?自分自身とはなにかの答えを求めることだった。その旅のいちばん最後にたどりついたのが、沖縄であった。

岡本太郎は、「沖縄とは、私にとって一つの恋のようなものだった」というほど、全身、全存在をこの対象にぶつけた。そして岡本太郎は、ある結論を導き出す。

「沖縄の中にこそ、失われた日本がある」。  
「沖縄ではじめて、私は自分自身を再発見した」とも言った。  
岡本太郎は、自ら沖縄へ溶け込み、そして自分自身と出逢ったのだ。約60年前に、彼が捉えた素顔のままの沖縄。そこには、痛切なる生命のやさしさがあつたという。岡本太郎の沖縄は、今の私たちに何を投げかけ、今の私たちとどうつながるのか?あるいは、つながらないのか?それを確かめに行くドキュメンタリー映画である。



**岡本太郎**  
Taro OKAMOTO  
芸術家。1911年生まれ。29年に渡仏し、「アブストラクション・クレアション(抽象・創造)協会」に参加するなど30年代のパリで前衛芸術運動に参画。パリ大学でマルセル・モースに民族学を学び、ジョルジュ・バタイユらと活動をともにした。40年帰国。戦後日本で前衛芸術運動を展開し、問題作を次々と社会に送り出す。51年に縄文土器と遭遇し、翌年「縄文土器論」を発表。50年代後半には日本各地を取材し、数多くの写真と論考を残した。70年大阪万博のテーマプロデューサーに就任。太陽の塔を制作し、国民的存在になる。96年に没した後、若い世代に大きな影響を与え続けている。



もう一度、  
太郎と沖縄を  
彷徨う旅に出る。



監督・製作: 葛山喜久    語り: 井浦新    製作総指揮: 平野暁臣    企画: 紀憂ティダ    製作: 大田直也    プロデューサー: 山里孫存・新里一樹  
撮影: 山崎裕・中村夏葉    構成: 山里孫存・葛山喜久    録音: 横澤匡広    製作: 沖縄テレビ開発    岡本太郎記念現代芸術振興財団  
配給・企画・製作: シンプルモンク    制作年: 2018年    制作国: 日本    ©2018 岡本太郎の沖縄製作委員会  
協賛: キヤノンマーケティングジャパン    ビケンテクノ    Mr.KINJO    オリックスレンタカー    東新住建



Be Okinawa    Okinawa Prefecture    OCVB    助成: 文化庁文化芸術振興費補助金